

編集委員が 行く

地域が興す新しい風 十勝の大地で動き出すプロジェクト

— 芽室町の想いが四国とつながる —

株式会社九神ファームめむろ

本誌編集委員 元東京経営者協会 障害者雇用アドバイザー 西嶋美那子



取材先データ

株式会社九神ファームめむろ

〒082-0078 北海道河西郡芽室町渋山8線24番地10
TEL 0155-65-2799 FAX 050-3614-7733
<http://kyujinfarm-memuro.co.jp/>

- 設立: 2012(平成24)年12月(開所2013年4月)
- 資本金: 1000万円
- 定員: 12人
- 事業内容: 作物の生産・販売、自社生産作物を活用した食品加工、お弁当の製造・販売、観光業

株式会社クック・チャム

〒792-0802 愛媛県新居浜市新須賀町2-6-16
TEL 0897-33-2115 FAX 0897-33-2116
<http://www.cookchum.co.jp/>

- 設立: 1974年4月
- 資本金: 1000万円
- 事業内容: オードブル・お弁当・会席膳の製造、店舗へのキット食材の製造・供給、フランチャイズ事業など

取材協力

株式会社ダックス四国

〒783-0046 高知県南国市岡豊町江村11
TEL 088-878-2311

- 事業内容: ポリスチレンペーパーおよびその他の合成樹脂製簡易食品容器の製造・販売並びに関連包装資材等の販売行
- ※株式会社エフピコの特例子会社

編集委員から

障害のある人たちの働く場の確保は、それぞれの地域の切実な問題でもあるが、行政の動きによっても明暗が異なる。芽室町の前向きな動きに、企業が応えて、土地の特産物を生かし、うまく循環する仕組みが創られた。こうした動きが各地で広がれば、障害のある人たちが無理なく働ける場が確保できると確信する。



(写真) 小山博孝

Keyword : 地域力、ネットワーク、高齢者活用、農業と食、個別支援計画、就労継続支援 A 型事業所、特例子会社、知的障害、発達障害、農・林・漁業

POINT

- ① 行政と企業の協働
- ② 欠かせないビジネスの視点
- ③ 全国展開のモデルとして



宮西義憲 芽室町長

自然豊かな芽室町

北海道十勝平野の真ん中に位置する芽室町は、人口2万人弱、農業生産がさかんな地域で、1戸あたりの平均耕地面積は31ヘクタールと道内でも屈指の規模を有し、1戸あたりの平均農業算出額は3600万円という大規模農家が多く、肥沃な土壌が広がる農業の生産拠点である。ここで生産される野菜は「十勝ブランド」として道内外からも人気が高く、高品質の生産物は全国で評価されている。また、豊かな自然ときれいな空気も魅力のひとつで、北海道の中では降雪量が少ない地域でもある。

芽室町では、「このまちで生まれ、育ち、素敵に老いる」をテーマに、すべての人が安心を感じられるまちづくりを目指しており、従来より先進的な取り組みを試みてきている。特に、子育てと福祉の領域では町独自の取り組みも多く、障害のある子どもには生まれたときからの育成記録として、子育てサポートファイル「めむたっち」が作成され、町としての個別支援計画が作られて、有効に活用されている。また、保育園・幼稚園から小学校へ、そして中学、高校と、各自の障害につい

ての正しい理解や育成記録の引継ぎが難しいといわれる教育分野でも、個別支援計画のスムーズな引継ぎが行われており、町でも関係する部署が必要に応じて話し合える場が設けられている。「子育ての木」と命名された一連の取り組みが、うまく機能し効果を発揮しているという。

町の想いがつながる

今回のプロジェクトによる障害のある人たちの就労の場の確保も、こうした流れの一環として、町が仕組みを模索しているなかから生まれたものと聞き、まず芽室町役場にお話をうかがいに行った。

町長の宮西義憲さんは2006（平成18）年から町長に就任しているが、その前は教育長として子どもたちの成長を見守ってきたおり、障害のある子どもたちの将来の働く場の確保が重要課題と認識されていたという。これまでも役場での就労体験支援事業や職場実習支援事業を立ち上げ、障害のある人たちの就労を後押ししており、町民や一般企業への理解促進も図ってきた。町としては、できれば福祉としての取組みでなく、芽室町の資源を活用したビジネスとして、障害のある人たちの働く場の確保をしたいと検討を重ねてきた。そのなかで、広島県の株式会社エフピコの特例子会社で、高知県にある株式会社ダックス四国

が、就労支援の一環として、障害者雇用の取組みを検討している他企業や地方公共団体などからも相談を受けていることを知り、早速面会を申し込んだという。

芽室町としては、当初間伐材をペレットにして活用することを考えていたが、ダックス四国からは豊富な農業生産物を活かす仕組みを提案され、2012年8月に、プロジェクトの実現に向けて、担当するアドバイザーとして、ダックス四国福山工場の且田久美係長が任命された。彼女は、何度か芽室町に赴き、現状の把握と役所としての支援体制を確認しながら、実現可能なビジネスモデルを作り上げ、町長に提案した。その概要は、出資を呼びかける企業にもメリットがあるように、十勝ブランドの農産物を障害のある人たちが生産して加工し、その加工品を出資会社すべて購入して活用するという仕組みだ。出資会社として候補にあがったのは、すでに障害者雇用の実績をもち、ダックス四国が以前から就業支援をしてきている、地元四国の食品加工・販売の企業、株式会社クック・チャムで、早速、相談を持ち掛けた。その後、芽室町と協議を重ねながら、企業にも利益をもたらす仕組みを、翌9月にはクック・チャムの藤田敏子代表取締役社長以下の経営陣に提案している。

クック・チャムにとっては、これまで現地で購入していた材料を自社で生産し



芽室町保健福祉課 中川ゆかり課長（左）と有澤勝昭課長補佐

加工し、しかも「十勝ブランド」というプレミアムが付いたものがお客さまに届けられるというメリット、あわせてコストの削減が可能になるという魅力がある。さらに障害のある人たちに働く場を提供できるという仕組みに経営陣は出資を即断し、11月には芽室町との最終合意を確認し、調印をしている。このプロジェクトの推進者である、芽室町の保健福祉課にお話を伺うと、「企業の決断の早さに、行政としてついていくのが大変だった」としながらも、「十勝ブランドが鍵になって実現した事業で、農業と福祉を組み合わせたモデルです」とうれしそうに語った。

十勝ブランドの利点を活かして進出

株式会社クック・チャムは愛媛県新居浜市に本社があり、四国はもちろんのこゝと九州や中国地方を中心にお惣菜の店舗を数多く展開している。社員の大半は女性で、「お母さんのやさしい味」を伝えたいと、できるだけ国産の材料を使い、安全安心な食材と、毎日でも飽きがこない味付けとメニューで、人気を呼んでいる。

藤田社長は、「これまでも本社や営業所などで障害のある人たちを雇用しているが、何かもつとできることがあつたらやりたいという気持ち、形として実現した」と語る。芽室町としても、地元企業の展開もなく、また北海道ではビジネスを展開



クック・チャム 藤田敏子代表取締役社長

していない企業であつたが、クック・チャムの「だれもが楽しく働ける職場を目指す」という企業理念に共鳴し、安心感を持ったという。北海道では初めての事業展開という藤田社長は、このところ足しげく芽室町を訪れ、この地域からお客さまに喜んでもらえる食品の提供が可能な事業の進展を、楽しみにしているようだ。

就労継続支援A型事業所設立へ

芽室町は、障害者の働く場を確保するために作られる事業所であり、出資する企業にとつても無理のない経営ができるように、障害者総合支援法に基づく「就労継続支援A型事業所」の設立を検討し、案をまとめた。新事業の立ち上げにはクック・チャムだけでなく、以前からつながりがあり、障害者雇用に積極的な企業にも出資を呼びかけ、最終的には3社が出資して新会社を設立し、株式会社九神ファームめむろとしてスタートしている。

る。九神というのは土地の名前だと思つていたら、「この会社を取り巻く、障害のある本人、家族、町、町民、福祉、企業、お客さま、教育機関、そして土地の恵み、と九つの神様たちと共に、関係者全員の幸せを目指す」という思いを込めて命名したとのこと。会社設立後、北海道に就労継続支援A型事業所の申請をし、1ヵ月後には認可が下り、2013年4月の開業に向けて準備が始まった。

しかし、すべてが順調に運んだわけではない。全国的には遊休農地がたくさんあり、農地確保には困らないと考えていたが、豊かな土地である十勝平野は大規模農家が多く、遊休農地はほとんど皆無であることには驚いたという。九神ファームめむろは町民に対してこのプロジェクトの理解促進のため説明会を開催したところ、障害のあるお子さんを持つ親御さんから農地貸出しの提供を受けることができ、とりあえずの農地確保ができたことと喜んだ。

芽室町は2012年8月1日に、「芽室町障がい者福祉就労事業所誘致推進会議」を設置し、関係する各部署の役職者が一同に集まり討議できる場を設け、且田さんをアドバイザーとして迎えている。縦割り行政のデメリットが生じないようという配慮であり、スムーズな意思疎通によりプロジェクトを後押ししている。町は、休所中の保育所を作業所として使



ジャガイモの皮むき、カット、袋詰めと作業が進む



九神ファームめむろ



用できるよう提供するなどして便宜を図り、農業指導や種の入手などに関しても、芽室町農業協同組合の支援を得るなどの仲立ちを積極的に行っている。働き手の障害のある人に関しても、町では以前からそれぞれの個別支援計画を作っていることから現状を把握しているので、募集もスムーズに運び、予定の定員を町の住民で確保できたという。

九神ファームめむろ

2013年4月に事業を開始した株式

会社九神ファームめむろは、障害のある社員9人と、支援員2人、サービス管理責任者1人で、通常の業務は行われている。障害のある社員は、療育手帳を持つ知的障害のある方が6人と、発達障害で精神保健福祉手帳をもつ方が3人となっている。社長はクック・チャムの藤田社長が兼務し、且田さんも事業アドバイザーとして継続的な支援を行っている。農業分野の技術指導をお願いしている職業指導員と、農業全般に関するサポートをお願いしているのは、地元農家の元気な高齢者たちで、この点でも、町が目指す

高齢者活用につながり、貢献している。

現在借用している3ヘクタールの畑ではジャガイモ、かぼちゃ、小豆などの生産が行われ、春から秋にかけての農繁期はもっぱら畑作業にかかり、冬場はジャガイモの加工がおもな業務となっている。農業作業は全員未経験の分野だったが、経験豊かな指導員のおかげで、昨年はジャガイモ30トン、かぼちゃ18トン、小豆3トンの収穫があった。クック・チャムが展開する店舗では、ポテトサラダやコロッケなどでジャガイモは毎日の必需品。年間になると30トンでは間に合わず、不足は芽室町農業協同組合から仕入れ、九神ファームめむろで加工し、クック・チャムに納品している。今後は耕作面積を拡大して、収穫量を増やしたり、作付けの種類を多くしていきたいと考えている。

作業効率は向上し続ける

社員の勤務は午前9時半から午後5時まで。全員作業服に着替え、加工作業開始は9時40分頃。泥のついた皮むきから始まり、仕上げの皮むき、カット、袋詰めと真空パック、そしてスチーム加熱の行程を全員で分担している。ピーラー（皮むき器）の扱いも慣れ、ジャガイモをくると廻しながら剥く速度は速く、隣では一定の大きさに手際よくカットしてい



—周年記念式典で社員一人ひとりがあいさつ

る。2人の支援員は、手の足りないところを補いながら、全体の動きを見ているが、1年前と比べると雲泥の差があるという。当初は1日約150kgだったが、現在は240から280kg、9月、10月の繁忙期には300kgを製造しており、健常者を上回る能力を発揮している。

来年度は勤務を2部のシフト制にして、新規採用の社員も含め生産力を上げ、1日350kgの製造を目指すという。現在、障害のある社員の賃金は11万円弱で、各種保険料を除いた手取りは約9万円となり、もちろん時給の最低賃金は確保されている。この賃金を保証しても、1年目の決算は少額ながら黒字を出すことができたと聞くと、福祉と企業の連携の強みを再認識せざるを得ない。

お披露目会で理解促進

九神ファームめむろは、芽室町が誘致して設立された会社ではあるが、地元企業でもなく地域住民にとっては馴染みが薄い。そこで、藤田社長は事業を開始した直後に、地域住民を招待して事業を紹介するお披露目昼食会を町公民館で開催した。親会社のクック・チャムの製造レシピによるポテトサラダやかぼちゃコロッセなどを用意し、障害のある社員たちが接客をし、藤田社長からは芽室町どのように事業展開していくかなどを説明し、

理解を深めた。一方、3人の高齢者の農業指導員やサポーターの活動も、地域の理解を深めるひとつの要因となっている。地域で長年にわたり農業に携わってきたベテランたちの持つネットワークと技術は、新しく進出する企業にとって貴重な財産でもある。当のご本人たちも会社が準備した名刺をすぐに使い果たしたというから、その前向きな姿勢には目を見張るものがあり、藤田社長も思わぬ効果に微笑んでいた。

一周年記念式典と内定式

九神ファームめむろを訪問した翌日は、会社設立1周年記念の式典と4月からの新規採用者の内定式が行われた。前日加工場で働いていた社員たちも、きちっとスーツを着こなし、招待された家族や関係者を会場で案内していた。式典では、社員全員で社則を暗唱し、社員一人ひとりの紹介に引き続き、藤田社長の挨拶では、この1年間の社員の成長を「夢をみているようだ」と慶び、企業主としての今後の抱負と希望を語られた。来賓として挨拶された宮西町長からは、企業への感謝が伝えられ、社員一人ひとりの成長をとらえながら、心温まる祝辞が贈られ、心から喜んでいく様子を感じられた。次に、サービスマン管理責任者の小川洋輝さんが、障害のある社員のご家族に前も

ってお願ひしていた手紙が披露され、これまでの成長を振り返りながら、この1年間のそれぞれの思いをお子さんや孫に伝え、感動のひと時であった。また、社員からはご家族に対して準備していたプレゼントの贈呈があり、ご家族の喜ばれる姿が印象的だった。式典は来年度入社予定者3人の内定式に移り、全員で記念写真を撮ってなかなか雰囲気なかで終了し、社員たちは午後から通常の業務に戻っていった。

医福食農連携シンポジウム

翌日は札幌で開催される医福食農連携「食でつながるイノベーション・シンポジウム」で、且田さんがパネラーとして登壇、九神ファームめむろの活動を紹介し、会場でもパネルブースが出るといっているので、同行した。北海道出身の有名料理人三國清三さんが話されるということもあろうが、予定では300人という参加者も、申込みが800人を越したというので、関心の高さがうかがえる。パネル討議後の質問でも、九神ファームめむろの活動についての質疑があり、終了後のブースでも、もっと詳しい情報がほしいと参加者が集まっていた。一般市民にとってもこの新しい取組みは興味深いものと受け入れられたようだ。



九神ファームの農作業。農業指導員やサポーターも一緒に汗を流した

まだまだ広がる プロジェクト

九神ファームめむろは、2014年度には町有地を借り受け、20人が働ける加工工場を新設する計画が、すでに決まっている。さらに、障害のある生徒たちが加工体験のできる施設も兼ねあわせ、職業体験を通してキャリア教育をしようと計画している。修学旅行で宿泊できる施設を整えば、道外の特別支援学校にも呼びかけをしようと、芽室町の施設であるめむろ新嵐山荘（しんあざやまどう）を活用する仕組みも検討。これらの事業の拡大を推進する役目として、総務省の「地域おこし協力隊制度」を活用して、芽室町ではコーディネートターを配置し、いずれは観光ビジネスへの拡大も目指している。全国の特別支援学校や都会の子どもたちにも芽室町に来てもらい、体験の場を提供できるよう夢は広がっている。

このような動きを見ていると、地方自治体のヘッドが音頭をとりながら、自治体にとって過度な負担なしにプロジェクトが進められていく過程が読み取れる。自治体によっては、予算がないからできないと諦めている場合も多いが、前向きで優秀な担当者を抱える自治体の強みを実感する。プロジェクトの推進役である芽室町保健福祉課にその手法をうかがうと、「町としてできる支援を検討し、やる

べきことをやっただけ」と控えめな返答がかえってきた。

宮西町長からも、「今後は芽室町の工業団地を活用して、障害のある人の働く場を拡充していきたい」という夢が語られているが、これからの動きに目が離せない。「障害者でもできる仕事」ではない。障害のある彼らが主役の会社だからこそ、できる仕事を追及していく」というこのプロジェクトのミッションは、この芽室を舞台にして実現に向かっていく。

モデルとして提示、 パッケージ化して他の自治体へ

芽室町の取組みは、将来構想も含めると、かなり多様な機能をもつプロジェクトだ。障害のある人の働く場を確保したいと考える自治体にとっては、どの面を切り取っても参考となるモデルと成りうる。もちろん置かれていた環境は異なり、そのまま真似をしてもうまくいかないだろうが、工夫するポイントは大いに参考になる。福祉の領域を抜け出し、利益を生む仕組みを考えるビジネスセンスや、企業のスピード感覚は欠かせない。地域のニーズを具体的に絞り込む行政の姿勢があれば、ビジネスの機会創出も不可能でない。両者のメリットを確認しながら、つなぎの役目を果たせるコーディネーターの存在も重要であり、今回のケースのように、自身の夢として取り組む姿勢を



札幌での医福食農連携シンポジウムで、且田さんが九神ファームめむろの活動を紹介した

持つ人の存在は、大変貴重だと感じている。

今回の取材は、時期としてプロジェクトが始まったばかりであり、もう少し大きく拡がった時点で、改めて取り上げてみたいと考えている。今度は季節の良い時期に訪問して、自然の豊かさを実感しながら、大きく育った夢のプロジェクトを楽しく拝見したいと心から願っている。